

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：23401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04214

研究課題名(和文) ボランティア活動参加の促進要因に関する総合的研究 - 社会関係資本との関係を中心に -

研究課題名(英文) A comprehensive study on factors promoting participation in volunteer activities - focusing on relations with social capital -

研究代表者

塚本 利幸 (Tsukamoto, Toshiyuki)

福井県立大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：40315841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ボランティア活動参加と社会関係資本(人間関係のネットワークへの包摂、他者への信頼、助け合いの規範)の関係を確かめる目的で調査を実施した。過去1年間の参加経験の有無に関して、定住性の高い地域では、人間関係のネットワークへの包摂という1要素だけが、人口流入の激しい地域では、それに他者への信頼を加えた2要素が影響していた。定住性の高い地域では、人間関係のネットワークに包摂されているものは、そうでないものに比べて、4倍近く、人口流入の激しい地域では、5倍近く、活動参加の可能性が高いことが確認された。人口流入の激しい地域で、他者への信頼が及ぼす影響はネットワークへの包摂の3分の1程度にとどまった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米の先行研究では、ボランティア活動参加に、一般的な他者への信頼が強く影響することが指摘されてきた。今回の調査では、他者への信頼よりも人間関係のネットワークへの包摂の程度の方が強く影響していることが明らかになった。欧米と日本では、人種や社会階層による棲み分けの程度や、ボランティア活動の社会への根付き方に差があること等が影響していると考えられる。ボランティア活動への参加の意向と過去1年間の参加実績に解離があることも確認された。ボランティア活動に参加したいと考えていても、きっかけがないと行動には結びつきにくい。ボランティア活動の活性化には、知り合いからの口コミ情報や勧誘が重要であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：A questionnaire survey was conducted to clarify the relationship between participation in volunteer activities and social capital (inclusion in networks of human relationships, trust in others, norms of reciprocity). In highly sedentary area, only one factor (the degree of inclusion in the network of relationships) affected whether or not residents participated in volunteer activities over the past year. In area with a high influx of people, factors such as the degree of inclusion in the network of relationships and the degree of trust in others were affected. It was confirmed that, in highly sedentary area, those who are included in the network are nearly four times as likely to participate in volunteer activities as those who are not. Similar probabilities were nearly five times higher in area with high population inflows. In area with a high influx of people, the effect of trust in others was about one-third compared to inclusion in the networks.

研究分野：社会調査

キーワード：ボランティア活動参加 社会関係資本 アンケート調査 統計的分析 地域特性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 福井県立大学ボランティア研究会では、平成24年度から25年度にかけて「福井県立大学地域貢献研究」の助成を受けて、福井県在住の60歳から80歳までのシニア層を対象とするボランティア活動参加に関するアンケート調査を実施した。調査によって収集したデータを分析していく中で、ボランティア活動参加と社会関係資本の関係について、欧米の先行研究とは異なる傾向がみられることが分かってきた。

欧米の先行研究では、ボランティア活動への参加の規定要因として、1) 一般的な他者への信頼の影響が大きいこと(どこの誰とは特定できないような他者一般への信頼が厚いものほど、ボランティア活動によく参加している)、2) 一般的な他者への信頼の程度は、友人・知人や近隣の住民などの顔の見える他者への信頼の程度とは、相関が高くないこと(顔見知り信頼しているからといって、他者一般への信頼が厚いとは限らない)、3) 一般的な他者への信頼の強さは、教育歴や社会階層などの外生的な要因に強く規定されること(高学歴で高収入のものほど、一般的な他者への信頼が強い傾向がある)などが指摘されている。

一方、福井県在住のシニア層の調査からは、1) ボランティア活動への参加の規定要因として、1) 地域の具体的な人間関係のネットワークに包摂されており、そうした人たちと助け合っているものほど、ボランティア活動によく参加していること、2) 一般的な他者への信頼の程度は、ほとんど影響していないこと、3) 一般的な他者への信頼の程度は、近隣や居住地の住民への信頼が厚いものほど高いこと、など、欧米の先行研究とは異なる傾向が、明らかになった。

(2) こうした違いが生み出される要因として、1) 先行研究が分析の対象としている欧米が、社会階層(収入や学歴、職業など)や人種などによるセグリゲーション(棲み分け)が顕著なのに対して、2) 福井県は典型的な内からの混住化地域であり、様々な社会階層の住民がモザイク状に入り混じって生活している、といった地域特性が働いているのではないかと予想される。

### 2. 研究の目的

福井県在住のシニア層を対象とした調査から明らかになった傾向が、1) 他の年代にも当てはまる傾向なのか、2) 福井県とは地域特性の異なる地域(住民の移動が激しい地域)でも同様の傾向がみられるのか、について確認する目的で、今回の調査・研究プロジェクトを企画した。

### 3. 研究の方法

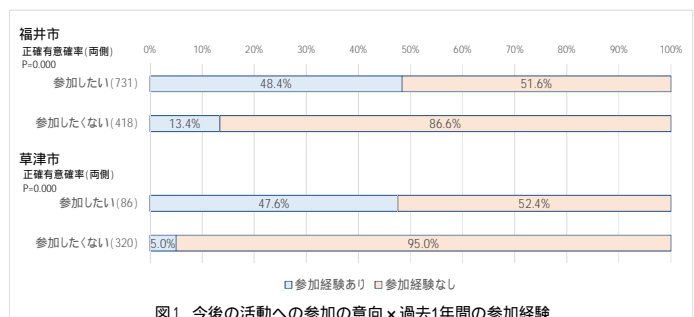
(1) ボランティア活動への参加(過去の参加経験の有無と今後の参加の意向)と、1) 地域の人間関係のネットワークへの包摂の程度や助け合いの程度、2) 一般的な他者への信頼、ならびに、近隣や地域住民への信頼の程度、3) 特定化互酬性の規範(助けてくれた人には、助け返すべきだという考え方)ならびに、一般的互酬性の規範(閉じた互助関係を越えて、困っている人には手助けをするべきだという考え方)の強さ、の関係を確認できるように調査票(アンケート用紙)の設計を行った。

(2) 調査の対象をシニア層以外にも広げるとともに、比較の対象として、福井県とは地域特性の異なる地域でも同様の調査を実施した。具体的には、福井市総合ボランティアセンターとの協力体制の下で、福井市在住の20歳から80歳までの一般住民から無作為抽出した4000人、ならびに、日本でも有数の人口流入地域である滋賀県草津市在住の20歳から80歳までの一般住民から無作為抽出した2000人、を対象に、郵送法によるアンケート調査を、2019年3月に実施し、それぞれ、1236人(有効回収率30.9%)、491人(有効回収率24.6%)から回答を得た。

(3) 収集したデータを統計的な手法を用いて分析し、シニア層を対象とした福井県調査の結果との異同を明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) シニア層を対象とした調査からは、今後ボランティア活動に参加したいと考えているものと、過去1年間に活動に参加したものの割合に、大きなギャップが存在していることが確認されている。今回収集したシニア層以外を含むデータの分析からも、同様の結果が得られた。福井市でも、草津市でも、今後、参加したいと考えているもののうち、過去1年間に参加経験を有するものは5割弱にとどまった。「参加してもいい」と思っているものが、実際の参加に向けて動き出すには、何らかのきっかけが必要なのではないかと推察される。



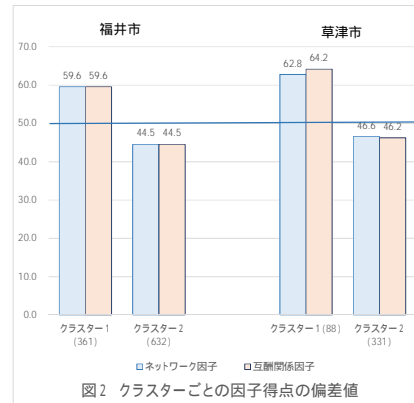
(2) 地域の人間関係のネットワークへの包摂の程度や助け合いの程度に関する質問項目について、より少数の要素にまとめ直す目的で因子分析をおこなった結果が表1である。ネットワークへの包摂の程度をあらわしていると考えられる「ネットワーク因子」と助け合いの程度をあらわしていると考えられる「互酬関係因子」の2つの因子(要素)が得られた。要素間の結びつきの強さを、統計的な手法(相関係数)で確認したところ、大きな結びつきが確認され、地域の人間関係のネットワークに包摂されているものほど、近隣と助け合っていることも確認された。

表1 地域の人間関係のネットワークへの包摂と助け合いに関する質問項目に対する因子分析の結果

項目	因子負荷量	
	因子1 ネットワーク因子	因子2 互酬関係因子
自治会(町内会)行事への参加の程度	0.895	-0.151
公民館活動への参加の程度	0.691	0.017
加入している団体の種類	0.378	0.182
近所付き合いの程度	0.437	0.356
近所の方に支えられた(助けられたこと)の種類	0.031	0.617
不自由になったときに近所の方にして欲しいことの種類	-0.126	0.623
近所の困っている世帯に対する手伝いの程度	0.055	0.438
自宅に招いた人の種類	0.120	0.354
累積寄与率(%)	31.106	38.074

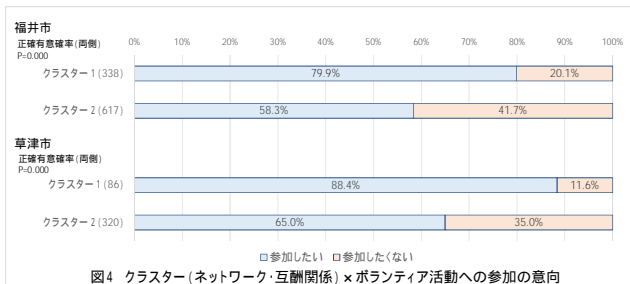
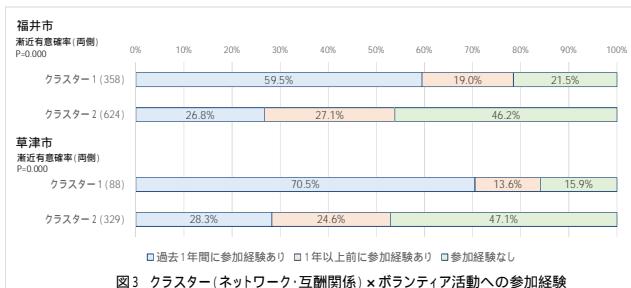
注1) 因子抽出法: 最尤法  
注2) 回転法: プロマックス法

(3) 因子得点を用いて、クラスター分析の手法により、福井市、草津市の回答者をグループ分けしたところ、両市とも「地域の人間関係のネットワークに包摂されており、互いに助け合っているグループ」(クラスター1)と「包摂されておらず、助け合っていないグループ」(クラスター2)に分かれた(図2)。



グループ間のボランティア活動への参加経験の違いを比較したものが図3、今後の参加の意向の有無を比較したものが図4である。

統計学的にみて、誤差の範囲に収まらない程度の違い(有意差)が、福井市でも草津市でも確認され、クラスター2に比べてクラスター1の方が、過去のボランティア活動への参加経験が豊富で、今後の参加の意欲も旺盛であることが分かった。



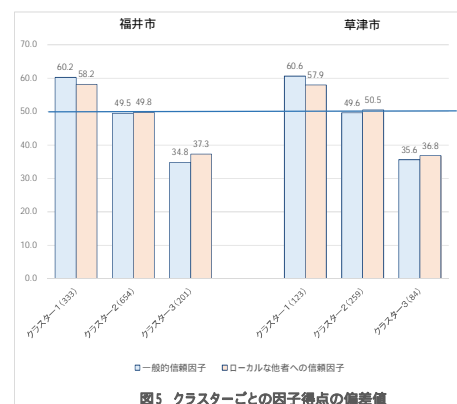
(4) 一般的な他者への信頼、ならびに、近隣や地域住民への信頼の程度に関する質問項目について、因子分析をおこなった結果が表2である。一般的な他者への信頼の程度をあらわしていると考えられる「一般的な他者への信頼因子」と近隣や地域住民への信頼の程度をあらわしていると考えられる「ローカルな他者への信頼因子」の2つの因子(要素)が得られた。要素間の結びつきの強さを、統計的な手法で確認したところ、大きな結びつきが確認され、地域住民を信頼しているものほど、他者一般に対する信頼も厚いことが確認された。

表2 他者への信頼に関する質問項目に対する因子分析の結果

項目	因子負荷量	
	因子1 一般的な他者への信頼	因子2 ローカルな他者への信頼
ほとんどの人は信頼できる	0.661	0.228
ほとんどの人は基本的に正直である	0.886	-0.035
私は人を信頼するほどである	0.606	0.092
ほとんどの人は基本的に善良で親切である	0.850	-0.046
ほとんどの人は他人を信用している	0.781	-0.048
ご近所の方を信頼できる	-0.010	0.863
お住まいの自治会・町内会の人たちを信頼できる	-0.054	0.994
お住まいの小学校区の人たちを信頼できる	0.091	0.803
累積寄与率(%)	53.139	68.873

注1) 因子抽出法: 最尤法  
注2) 回転法: プロマックス法

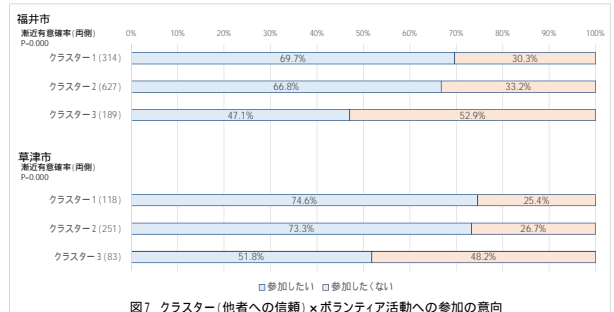
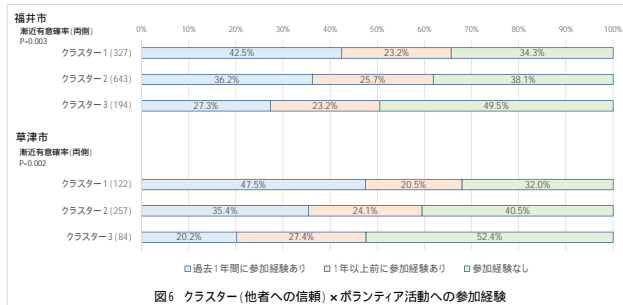
(5) 因子得点を用いて、クラスター分析の手法により両市の回答者をグループ分けしたところ、両市とも「一般的な他者への信頼もローカルな他者への信頼も厚いグループ」(クラスター1)、「どちらへの信頼も中程度のグループ」(クラスター2)、「どちらへの信頼も薄いグループ」(クラスター3)に分かれた(図5)。



グループ間のボランティア活動への参加経験の違いを比較したものが図6、今後の参加の意向の有無を比較したものが図7である。

福井市でも草津市でも有意差が確認され、クラスター

ー 1、クラスター 2、クラスター 3 の順に、過去のボランティア活動への参加経験が豊富で、今後の参加の意欲も旺盛であることが分かった。



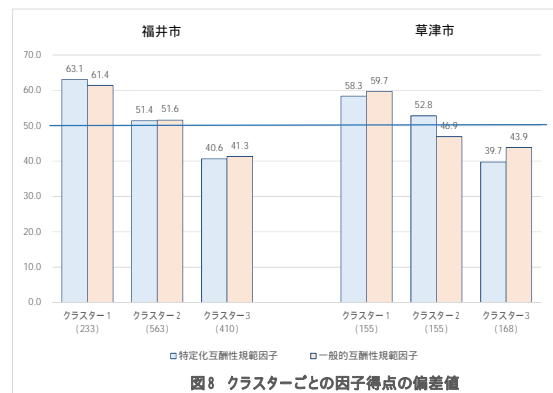
(6) 他者との助け合いに関して、どうあるべきだと考えているか(互酬性の規範)に関する質問項目について、因子分析をおこなった結果が表3である。閉じた関係の内部での助け合いを志向していると考えられる「特定化互酬性因子」と、開かれた関係性において、直接的な見返りを想定しない援助を志向していると考えられる「一般的互酬性規範因子」の2つの因子(要素)が得られた。要素間の結びつきの強さを、統計的な手法で確認したところ、大きな結びつきが確認され、顔の見える関係での助け合いを志向しているものは、匿名的な他者への援助にも積極的であることが確認された。

表3 互酬性の規範に関する質問項目に対する因子分析の結果

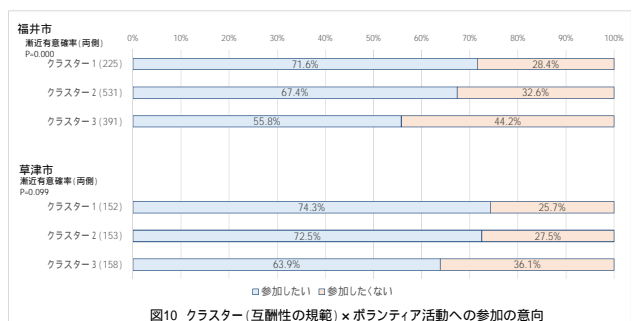
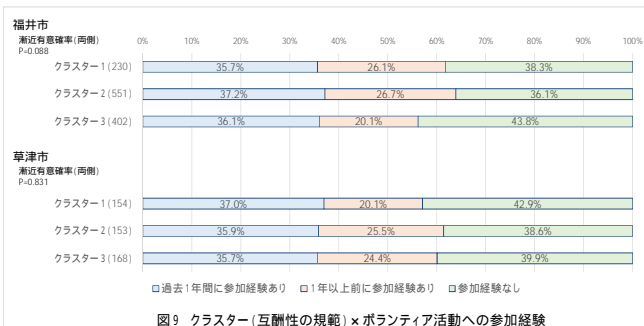
項目	因子負荷量	
	因子1 特定化互酬性規範因子	因子2 一般的互酬性規範因子
人から何か手助けしてもらったら同じだけ助け返すべきだ	0.701	0.119
人から何かを贈られたら同じだけお返しをするべきだ	0.992	-0.113
人にかけて迷惑は犠牲を払ってでも償うべきだ	0.410	0.277
自分の利益よりも社会の利益を第一に考えるべきだ	0.086	0.274
私を頼りにしている人には親切にするべきだ	0.040	0.706
困っている人には手助けをするべきだ	-0.046	0.757
累積寄与率(%)	35.397	50.068

注1) 因子抽出法: 最尤法  
注2) 回転法: プロマックス法

(7) 因子得点を用いて、クラスター分析の手法により両市の回答者をグループ分けしたところ、両市とも「特定化互酬性の規範も一般的互酬性の規範も強く働いているグループ」(クラスター1)、「どちらも中程度に働いているグループ」(クラスター2)、「どちらもあまり働いていないグループ」(クラスター3)に分かれた(図8)。グループ間のボランティア活動への参加経験の違いを比較したものが図9、今後の参加の意向の有無を比較したものが図10である。参加経験に関しては、福井市でも草津市でもグループ間に違いが確認されなかった。今後の参加の意向に関しては、福井市では有意差が確認されたのに対して、草津市では確認されなかった。



両市の人口に比例させてサンプリングを実施したため、分析に使用したサンプル数に2倍以上の差があり、そのことが有意差に関する検定に影響している可能性が考えられる。



(8) 上記の分析からは、対象者をシニア層に限定しない場合、1) 地域の間人関係のネットワークに包摂されており、近隣や地域の住民と助け合って暮らしているもの、2) 近隣や地域住民への信頼が厚く、他者一般に関しても信頼しているもの、はボランティア活動への参加経験が豊富で、今後の参加意欲も旺盛であること、一方、3) 閉じた人間関係の内部での助け合いの規範や開かれた関係性における他者への援助に関する規範は、ボランティア活動経験や参加の意向に、あまり影響を与えていないことが確認された。

ここまでの分析に使用してきた因子間には、「ローカルな他者への信頼因子」と「ネットワーク因子」、「互酬関係因子」の間に、相関係数が0.4程度の有意な結びつきが確認される(表4)。

以下では、こうした因子間の結びつき(相関関係)が分析に与える影響を排除する手法として、重回帰分析を採用する。

(9) 過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無、今後のボランティア活動への参加の意向の有無、を従属変数(説明される変数) 因子分析によって得られた因子を独立変数(説明する変数)として、ロジスティック回帰分析をおこなう。ロジスティック回帰分析は重回帰分析の一種で、従属変数が、経験の「ある、なし」、意向の「ある、なし」のように二者択一になっている場合に用いられるものである。それに合わせて独立変数に関しても、中央値を基準に因子得点の高いグループと低いグループに2分割したものを投入する。また、重回帰分析に、結びつきの強い変数を同時に投入すると、不具合が生じることが知られているため、「ネットワーク因子」と「互酬関係因子」、「一般的信頼因子」と「ローカルな他者への信頼因子」、「一般的互酬性規範因子」と「特定化互酬性規範因子」から、それぞれ代表として「ネットワーク因子」、「一般的信頼因子」、「一般的互酬性規範因子」のみを分析に使用する。なお、福井市、草津市のサンプル数の差によって分析結果が影響を受けないように、以下の分析では重み付けの手法によりサンプル数の差を補正している。

(10) 過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無を従属変数にした分析の結果が表5である。福井市に関して、参加経験の有無に、統計学的にみて誤差の範囲に収まらない影響を与えているのは、「ネットワーク因子

(2分割)」だけである。表中のオッズ比の値は、3.920となっているが、これは、地域の間関係のネットワークに包摂されているものは、そうでないものより3.920倍(4倍近く)過去1年間にボランティア活動に参加していた可能性が高いことをあらわしている。草津市に関しては、「ネットワーク因子(2分割)」と、「一般的信頼因子(2分割)」の2因子が有意に影響している。オッズ比をみると、地域の間関係のネットワークに包摂されているものは、そうでないものより4.741倍(5倍近く)、他者一般を信頼しているものは、そうでないものより1.440倍(1.5倍程度) ボランティア活動に参加していた可能性が高いことが分かる。定住性が高く、住民間の匿名性が低い福井市では、「ネットワーク因子(2分割)」のみが有意に影響しているのに対して、人口流入が激しく、住民間の匿名性が高いことが予想される草津市では、「ネットワーク因子(2分割)」に加えて、「一般的信頼因子(2分割)」も有意に影響していることが確認できるが、オッズ比は「ネットワーク因子(2分割)」の方がはるかに大きい。

(11) 今後のボランティア活動への参加意向の有無を従属変数にした分析の結果が表6である。福井市でも、草津市手でも、投入した3つの独立変数すべてが、統計学的にみて誤差の範囲に収まらない影響を与えている。

オッズ比の値をみると、「ネットワーク因子(2分割)」が、福井市では1.863、草津市では2.729と、地域の間関係のネットワークに包摂されているものは、そうでないものより、それぞれ2倍近く、3倍近く、参加の意向を有している可能性が高い。これに対して、「一般的信頼因子(2分割)」と「一般的互酬性規範因子(2分割)」のオッズ比は、両市とも1.5以下にとどまる。実際に参加したかどうか比べて、参加する気があるかどうかには、他者への信頼や助け合いの規範のような要素も影響を及ぼすものの、地域の間関係に包摂されているかどうかの方が、影響力が大きいことがわかる。

表4 因子間の順位相関係数

	互酬関係因子	一般的信頼因子	ローカルな他者への信頼因子	特定化互酬性規範因子	一般的互酬性規範因子
ネットワーク因子	相関係数: 0.738 有意確率(両側): 0.000 度数: 1412	0.234 0.000 1365	0.383 0.000 1365	0.014 0.610 1393	0.086 0.001 1393
互酬関係因子	相関係数: 0.254 有意確率(両側): 0.000 度数: 1365		0.415 0.000 1365	0.053 0.047 1393	0.158 0.000 1393
一般的信頼因子	相関係数: 0.000 有意確率(両側): 0.000 度数: 1654		0.647 0.000 1654	0.156 0.000 1644	0.221 0.000 1644
ローカルな他者への信頼因子	相関係数: 0.000 有意確率(両側): 0.000 度数: 1644			0.152 0.000 1644	0.237 0.000 1644
特定化互酬性規範因子	相関係数: 0.000 有意確率(両側): 0.000 度数: 1684				0.617 0.000 1684

表5 過去1年間の参加経験の有無を従属変数にしたロジスティック回帰分析の結果

地域	独立変数	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
福井市	ネットワーク因子(2分割)	3.920	2.945 - 5.217	P<0.001
	一般的信頼因子(2分割)	0.912	0.688 - 1.210	NS
	一般的互酬性規範(2分割)	0.993	0.752 - 1.312	NS
草津市	ネットワーク因子(2分割)	4.741	3.587 - 6.268	P<0.001
	一般的信頼因子(2分割)	1.440	1.087 - 1.907	P<0.05
	一般的互酬性規範(2分割)	1.009	0.762 - 1.335	NS

表6 今後の活動への参加の意向の有無を従属変数にしたロジスティック回帰分析の結果

地域	因子	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
福井市	ネットワーク因子(2分割)	1.863	1.405 - 2.472	P<0.001
	一般的信頼因子(2分割)	1.403	1.056 - 1.863	P<0.05
	一般的互酬性規範(2分割)	1.467	1.107 - 1.944	P<0.01
草津市	ネットワーク因子(2分割)	2.729	2.020 - 3.685	P<0.001
	一般的信頼因子(2分割)	1.392	1.046 - 1.852	P<0.05
	一般的互酬性規範(2分割)	1.350	1.015 - 1.795	P<0.05

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子	4. 巻 50
2. 論文標題 アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心 - 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 5 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福井県立大学論集	6. 最初と最後の頁 27-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子	4. 巻 49
2. 論文標題 アクティブシニアのICT利用とボランティア活動 - 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 3 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福井県立大学論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子	4. 巻 49
2. 論文標題 アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本 - 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 4 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福井県立大学論集	6. 最初と最後の頁 15-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子	4. 巻 52
2. 論文標題 アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件 - 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 6 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福井県立大学論集	6. 最初と最後の頁 59-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 塚本利幸
2. 発表標題 アクティブシニアのボランティア活動参加の規定要因の総合的分析
3. 学会等名 日本地域福祉学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshiyuki Tsukamoto, Shinsuke Funaki, Naoko Hashimoto, Yuko Nagai
2. 発表標題 A comprehensive study on factors promoting participation in volunteer activities among active senior citizens in Japan
3. 学会等名 SWSO (Social Work, Education and Social Development) 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塚本利幸
2. 発表標題 アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件
3. 学会等名 日本地域福祉学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshiyuki Tsukamoto, Shinsuke Funaki, Naoko Hashimoto, Yuko Nagai
2. 発表標題 The way of interest in social problems and volunteer activity among active senior citizens in Japan
3. 学会等名 Asian and Pacific Association for Social Work Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshiyuki Tsukamoto, Shinsuke Funaki, Naoko Hashimoto, Yuko Nagai
2. 発表標題 A study on the influence of social capital on the mental health of residents of local city in Japan
3. 学会等名 Asian and Pacific Association for Social Work Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	舟木 紳介  (Funaki Shinsuke)  (50315842)	福井県立大学・看護福祉学部・准教授   (23401)	
研究分担者	橋本 直子  (Hashimoto Naoko)  (40585345)	福井県立大学・看護福祉学部・准教授   (23401)	
研究分担者	永井 裕子  (Nagai Yuko)  (70460590)	福井県立大学・看護福祉学部・助教   (23401)	
研究協力者	永井 佑紀  (Nagai Yuki)		福井市総合ボランティアセンター(当時)